

淫魔、という単語を聞いて、貴方はどのような存在を思い浮かべますか？

人の精神を墮落させる悪魔？

人の体液を搾り取り栄養とする魔物？

……あるいは、御伽噺に出てくる存在しない生物？

人によってイメージに細かな違いはあるかもしれませんが、「想像上の生

き物である」というのは現代を生きる人間たちの持つ共通認識なのではない

でしょうか。

ですが、残念ながらそれらの認識は間違っています。

彼らは実在します。貴方の隣、貴方の意識の外。鏡一枚を隔てた向こうから貴方を見つめているのです。

そしてその生態も、貴方がたのイメージとは少し違っているかもしれません。

淫魔たちの根城は、人間界からは視認できない裏側の世界——「魔界」と呼ばれる場所にあります。

……こういうとんだか、彼らがとても禍々しい存在かのように聞こえて
しまいますね。

けれど、実際のところは違います。

彼らは人間と同じように家族を作る種族であり、同時に伴侶を愛し、自分
の大切な相手を幸せにすることを至上とする、とても愛情深い種族なので
す。

今日は貴方の知らない、謎に包まれた「淫魔」という種族の生活について

て、少し覗いてみましょう。

ちゅここここここここ♡♡♡

「んおおおおおっ♡♡♡それだめえ♡♡♡いぐいぐいぐいぐっ♡♡♡
またいっっちゃうう♡♡♡♡♡」

シャンデリアの煌めく豪華な一室に、女性の悲鳴が響き渡っています。そ

の悲鳴は苦しげにも関わらず、何処か甘ったるい響きを含んでいました。

それもそのはずです。

女性は衣服を身につけていませんでした。上も下も、ブラジャーもショール

ツも全て。一糸纏わぬ体に、薄桃色の半透明な触手のようなものが何本も伸びています。

触手のうち何本かは、彼女の胸に伸びています。狙いは膨らみのてっぺんにある突起。ぷっくりと勃ち上がったそこを、どろどろの粘液をまとった柔

らかな触手が舐め回しています。

ぺろぺろ♡♡れろれろ♡♡

「おほおっ♡♡ぺろぺろだめえ♡♡おっぱい敏感になっちゃうからあ♡♡」

彼女の甘ったるい悲鳴にも、触手たちは一切耳を貸しません。そもそも耳などないのだから、当たり前の話ではあるのですが。

ぴんと尖った胸の突起を優しく舐め回され、かと思えばくりくりと捏ね回され……突起を弄くり回されるたびに情けない声を上げながら絶頂してしま

う女性。

彼女の胸の突起は、元からこんなに敏感だったのでしょうか？

……答えはノーです。彼女は元々性交経験がほぼ皆無であり、生まれてからここに来るまでの約三十年間、その体はほとんど未開発のままでした。

当然、胸を弄られて快感を得られるような感度など育っているわけもありません。何もしていないのに突然気持ちよくなれるなんて都合のいい展開、そうそうあるわけがないのですから。

彼女が胸の突起で絶頂出来るようになったのは、触手の持つ特性と、この触手の“主”による努力の賜物でしょう。

ぺろぺろ、くちゆくちゆ、れろれろ……彼女の肌を舐め回す触手は、決まって触手自身と同じ薄桃色のどろりとした粘液をまとっていました。その粘液が肌に触れるたび、触手によって肌に塗りつけられるたび、女性はよりいっそう上擦った悲鳴を上げます。

「んやあああ♡♡ぬるぬるやだあ♡♡また敏感になっちゃう♡♡媚薬もう

やだぁ♡♡」

甘ったるく泣き叫びながら絶頂する女性。彼女の言う通り、どろどろの粘液は全て高濃度の媚薬なものでした。

より正確に言えば、媚薬なのは粘液だけではありません。彼女の体を這い回る触手そのものが、全て特濃の媚薬で出来ています。彼女に合わせ、彼女を気持ち良くすることに特化した特製の媚薬。肌に触れただけでも泣き喚きながら身悶えしている彼女の姿を見れば、これを作った者がどれだけ彼女を

気持ち良くしたいと願っていたかよく分かることでしよう。

そして、媚薬触手が蹂躪しているのは彼女の胸だけではありません。

彼女の体を覆う、もう一本の太い触手。

それは彼女の下半身へと伸びていました。大きく開かれた足の付け根、先ほどから触手に負けないくらいにどろどろで粘っこい本気汁を垂れ流している彼女のおまんこ——の、少し上。ぴよこん、と飛び出したその突起。

クリトリス——女性の体の中で唯一、何もしなくとも気持ち良くなれる器

官。体に備わったバグのような、あまりにも都合の良い器官であるそこを、薄桃色の触手はぱっくりと飲み込んでしまっていました。

胸の突起と同じくらい、あるいはそれ以上にぴんと勃起上がったそこ。身を守るための皮などどつくのとうに剥かれてしまっていて、興奮と絶え間ない愛撫によって膨らみきったそこはもう二度と包皮の中には戻れないだろうと一目で分かる有様でした。

ずる剥けになった真っ赤な果実を、触手の肉筒が激しく扱き上げていま

——にゆるり。

うねうねにゆるにゆると動く肉筒の中を、別の触手が這い回っています。

分厚く平べったいその表面はどこかざらついていて、まるで人間の舌のよ

うでした。媚薬粘液をたっぷりとまとったそれが、肉筒に吸い上げられ伸び

きったかわいそうなクリトリスにぴったりと吸い付いて。

れろおくくくっ♡♡♡♡

と、舐め上げました。

「……くくくっ♡♡♡♡♡」

ふしゃああああ♡♡♡♡♡

女性はもはや、声を上げることすら出来ません。ただ思いきり喉をさらしてのけぞりながら絶頂し、おしっこの穴から透明な液体を噴き上げています。

深く重たい絶頂とともにイキ潮を噴いてしまうのも、もう何度目のことでしょうか。女性の体には、一方的に与えられる快感への敗北宣言のようなこ

の行為がすっかり癖づいてしまっていました。ここへ来るまで、まったくもって知らなかったことのはずなのに。

にゆるにゆる♡♡にゆこにゆこ♡♡くちくち♡♡

彼女がイキ潮を噴いた瞬間、待機していた細い触手がおしっこ穴へと群がります。一滴も残したくないと“持ち主”の意志を示すかのようにぺろぺろ♡♡と穴の周りを舐めほぐしはじめました。度重なる開発と媚薬で出来た触手の愛撫によって、本来快感を得る器官ではないはずのおしっこ穴は彼女に

とって立派な性感帯へと育て上げられてしまっていました。今ではイキ潮を
嘔いてしまった瞬間に透明な液体がおしっこ穴の肉壁を擦り上げる快感によ
って追いうち絶頂をキメてしまうほどです。

「んおっ♡♡しよれだめ♡♡おしっこ穴ぺろぺろしないれ♡♡きもちよくな
っっちゃうからあ♡♡」

彼女がどれだけ腰をへこへこ♡♡と動かしても、触手は一ミリも動くこと
なくおしっこ穴を責めたて続けます。

そしてもちろん、触手が群がっているのはおしっこ穴だけではありませんでした。

れろれろ♡♡ぐちゅぐちゅ♡♡こりゅこりゅ♡♡

とんとん♡♡とんとん♡♡とんとん♡♡

彼女が快感を得るたび、きゅんきゅんと疼きながら粘っこい愛液を溢しているおまんこ。そこにも当然、無数の触手が伸びています。吐き出された愛液を余すことなく舐め尽くしては、代わりに媚薬をおまんこへと塗りたく

り、すでに極限まで感度を引き上げられ少し弄られただけでも絶頂してしま
うようになったよわよわおまんこをよりいっそう追い詰める薄桃色の柔らか
な舌。ひっきりなしにもたらされる快感によって、彼女の〇スポットはふ
っくりと膨らんでいます。まるで触って♡♡いじめて♡♡とアピールしてい
るようなそこを、触手たちが見逃すわけもなく。

とんとん♡♡とんとん♡♡

こりゅこりゅ♡♡こりゅこりゅ♡♡

「おほおおっ♡♡じーすぽこりこりきつい♡♡だめ♡♡あたまおかしくな
っっちゃうからあ♡♡もうゆるしてよお♡♡」

膨らみきつたのスポットを触手がこりこり♡♡ぐにぐに♡♡と揉みしだ
くたび、彼女は全身が蕩けてしまいそうなほどの快感に咽び泣いています。
ひたすら泣き叫び許しを乞っています、彼女に群がる触手が耳を貸すこと
はありません。

それは、触手には耳がないから……などではなく、触手を使役する“主”

の意向によるものでした。

彼女にひたすら快楽を与え続け、咽び泣くほど「しあわせ」にし続ける。

それこそが“主”の意向であり、“主”の留守を任された触手にインプットされているたった一つの行動原理なのです。

もちろん、これは彼女の意に沿ったものではありません。

彼女に与えられているのは間違いなく純粹な快感であり、痛みや苦しみなどの身体的な苦痛は一切受けていません。ですが用法容量を守らない薬が毒

であるのと同じで、過ぎた快感は彼女にとってもはや苦痛に等しいものでした。

では、彼女はその凄まじいまでの快楽を、ただ無抵抗で受け入れているのでしょうか？

もちろん違います。彼女は出来る限り抵抗していました。身を振って触手から逃れようとしたり、少しでも快感を逃がそうとしたり。

けれど、そのすべてが呆気なく失敗に終わっていました。胸の突起を舐め

回す触手も、クリトリスをもみくちやにし続ける触手も、おまんことおしつこ穴を舐めほぐす触手も、獲物を放すことなくひたすらなぶり続けています。……唯一、おまんこの奥のみ蹂躪を免れているのは、“主”の意向でしょうか。他の性感帯をすべて弄り回されてイカされ続けている女性にとっては、何の休息にもなりませんでしたが。

こんなにももう無理、もう許してと泣き叫んでいるにも関わらず、なぜ逃げることが出来ないのか。

それは、彼女が身を預ける「ベッド」によるものでした。

その「ベッド」は、触手と同じように半透明の薄桃色をしています。ぶよぶよと柔らかくどこか弾力のあるそれは、分かりやすく言えば「人をダメにするソファ」が人ひとりをすっぽりと包み込めるくらいに大きくなったような形状をしていました。

彼女はそこに、手を頭の上で組んで足をM字型に開いた状態で身を預けています。

……ただしそれぞれ、前腕とふくらはぎの部分がすっぽり「ベッド」に飲み込まれた状態で。

飲み込まれた体の一部に痛みはありません。ただどれだけがいても抜けることはなく、柔らかな感触と肌に媚薬が染み込んでゆくぞくぞくとした感触を肌に伝えてくるだけでした。

彼女の体をなぶる触手たちは、皆このベッドの至るところから伸びています。それはつまり、ベッドそのものが彼女をなぶる触手たちと同じ素材――

高濃度の媚薬で出来ていることを意味しています。

触手の主であり彼女をここへ寝かせた張本人でもある存在は、これを「触手ベッド」と呼んでいました。君を悦ばせるために作った僕の特製だよ、とも。

彼女にしてみれば、意味が分かりませんでした。痛みのない優しい拘束によって動きを封じられ、ただひたすら暴力的な快感を体に叩き込まれ、ただ咽び泣きながら絶頂することしか出来ない自分。

こんなものを見て、いったい何が楽しいのか。

問いかけたところで、今まで満足のいく答えが返ってきたことはありません。
ん。

なので彼女は今日も、煮立った頭で考えるのです。

（――いったい、どうしてこんなことになったんだろう？）

考えたところで答えが出ないことなんて分かりきっていましたが、それでも考えないわけにはいきません。

彼女はごくごく普通のOLでした。それなりの真面目さで仕事をこなし、あまり社交的ではないなりに少ないけれど友達もいるような、どこにでもいる女性です。唯一恋愛経験だけはあまりないのが悩みではありましたが、それだって恋人がないことを本気で悩んでいたというよりは、「この歳になつて」という部分での周りに対する引け目の方が強かったのではないでしょうか。

いつものように仕事をこなし、家に帰り、疲れた体をお風呂で癒し、スー

パーで買った見切り品で夕食を済ませて就寝。

目が覚めたとき、彼女はここにいました。今と同じように一糸纏わぬ姿で、触手ベッドに全身を拘束されて。

自分が何故こんな目に遭っているのか？……どれだけ考えても、彼女には分かりません。

いえ、正確に言うならば「分からない」より「理解出来ない」といった方が正しいでしょう。

何故なら、理由そのものはとくに説明されているのです。彼女をここに連れてきた存在……触手たちの“主”によって。

ただその理由が、女性にとっては一ミリも理解出来なかったため……彼女は今でも快感によってうまく回らない頭の片隅で、答えの出ない問いについて考え続けているのです。

嗚呼、しかし——そうやって考え続けていられる時間にも、リミットが存在します。

かつん、かつん、かつん……。

部屋の外から聞こえる足音が耳に届いた瞬間、彼女の思考は消し飛びました。心臓がどくんどくと高鳴りだし、ぐるぐると同じところを巡っていた思考が一色に染まります。

(あ、あ、あ……♡♡やだやだ、またあれがくる……!♡♡わけわかんないくらいおかしくされちゃう……♡♡こわい、こわいよお……♡♡)

触手の蹂躪が止まったわけではありません。おまんこもクリトリスも相変

わらず一方的になぶられ続けていて、泣き喚きながら絶頂することしか出来ないような強すぎる快感を彼女の体へ一方的に送り込んでいます。

けれどこの瞬間だけは、触手から与えられる快感よりも、“これから起こること”への恐怖と絶望、……それにわずかな期待だけが、彼女の頭を占めているのでした。

逃げることも出来ないまま、ぎぎぎ……と音を立てて開いた扉の向こう。

見えたのは、彼女が予想していた通りの顔でした。

白衣に身を包んだ、すらりとした体躯。ふわふわでウェーブのかかった銀髪に、ぱっちりとした切れ長の瞳は鮮血のような紅に染まっています。まるでビスクドールのような、真っ白できめ細やかな肌には傷ひとつありません。体温の感じられない整いきった顔立ちのなか、薄い桃色に染まった頬だけがほんのひとさじ幼い印象を与えています。

おおよそ人間離れた美貌ですが、人間離れしているのはそこだけではありません。緩やかに波打つ銀色の髪——それをかける彼の髪は、一般的な人

間と比べて長く尖っていました。まるで御伽噺に出てくる長命種のように。

明らかに人間ではないことを示すその特徴を除けば、彼の容姿は絶世の美少年と表現して差し支えないものでした。実際、彼女も初めて彼の姿を見たときは自分の置かれた状況も忘れて思わず見入ってしまったほどです。

もっとも今となつてはその美貌はあまりにも淫靡な快樂と紐づいてしま

い、恐怖と期待によつておまんこをひくつかせるきっかけにしかかつていないのですが……。

「戻ったよ、サヨコ。時間にして十四日と二時間三十六分ぶりかな。予定していたよりもだいぶ遅くなってしまった。途中で顔を見に戻ろうとも思ったんだが……触手に肉豆を扱き上げられて絶頂しているサヨコの姿を一目見てしまったら、きっと歯止めがきかなくなると分かりきっていたからね、どうしても戻れなかったんだ。……ごめんな、寂しい思いをさせて」

穏やかなアルトボイスには、申し訳ないという感情が滲んでいます。まるで、自分が側にいなければ彼女は寂しがるだろうと信じて疑っていないかの

ように。

この言葉を聞いて、誰が予想出来るでしょうか。

彼こそが、今まさに彼女——サヨコの体の弱点を覆い尽くしては蹂躪している媚薬触手たちを創り出し使役している“主”であることなど。

そしてこの触手たちの快感を与える行動が全て、彼自身が今までサヨコの体に対して行なってきた動きをインプットしたものであることなど。

ふたつの胸の膨らみに群がり、柔らかな頂にある突起を先っぽから伸びた

舌でぺろぺろ♡♡と舐め回す無数の触手も、

ぽってりと、まるで果実のように育ちきったずる剥けクリトリスを熱く蕩けるような肉筒で包み込みじゅこじゅこ♡♡と扱き上げる触手も、

少しお腹に力を入れただけでも絶頂しそうになるほどにふっくらと膨らんでしまった♡スポットを容赦なくぐりぐり♡♡ぞりぞり♡♡と押し潰しては捏ね回している触手も。

全部ぜんぶ、彼がサヨコを絶頂させ続けるために生み出したものなので

す。

「僕がいない間も、君が寂しくないように。これを僕だと思って可愛がられてくれ。」

……愛しているよ、僕のサヨコ」

部屋を出る前、まるでひとときの別れを惜しむ恋人のように寂しげな微笑みを浮かべながら触手たちを差し向けてきた美しい少年の顔を、サヨコは今でも覚えています。

この美少年がこの部屋の外で何をしていたのか、彼女は知りません。彼が部屋を空けることは度々ありましたが、その理由をきちんと説明してもらったことはありませんでした。出て行くときの彼はいつも眉間に皺を寄せ不満げな顔をしているので、どうやらあまり楽しくない用事であることは確かかのようにです。

そしてその中でも、今回の不在は歴代最長でした。この部屋には時計がないため彼女はどれだけ時間が経っていたのか今の今まで知りませんでした

が、彼の方は律儀に時間を数えていたようです。

時間にして十四日と二時間三十六分。それだけの時間、彼女はずっと触手に犯され続けていました。四肢を拘束され、媚薬を全身に塗りたくられ、一切休むことなくイキ狂わされ続けていたのです。

「まったくあの老害ども、自分が番といちゃいちゃしていたいからってこっちに雑用を押し付けやがって……。正直もう僕は人間界とのパスとかどうでもいいんだけどなあ。僕が魔術の腕を磨いているのは全部サヨコのためなの

に、迷惑にもほどがある……」

ため息混じりの愚痴をこぼす美少年。吐き捨てるような険しい表情が、のけ反りアクメをきめている彼女の甘ったるい喘ぎ声を聞いた瞬間ふっと和らぎました。

「……おっと、つい気が緩んで愚痴をこぼしてしまった。ごめんな、今はサヨコとふたりっきりなのに」

優しく、穏やかな声。愛おしくてたまらないと、こちらに訴えかけてくる

ようです。

けれど——いやだからこそ、サヨコの胸の中にある不安と恐怖はどんどん大きさを増していくようです。

これから何をされるのか……自分がどんな無様な姿を晒してしまうのか。

脳裏を過ぎる甘く惨たらしいイメージに、彼女のおまんこがきゅん♡♡と疼きました。

「~~~~♡♡ふ、うう~~~~♡♡ほおっ……♡♡」

ぞくぞくぞくぞくっ♡♡

触手ごとおまんこを締め付けてしまい、ふっくらと膨らんだのスポットが自分の動きで圧迫される快感に背筋をぶるぶると震わせながら絶頂するサヨコの姿を見下ろして、……少年の紅い瞳に、じわりと妖しい情欲の色が灯ります。

「ふふ、サヨコは今日も可愛いな♡♡……おっとそうだ、まずは君の体にもきちんと挨拶をしなくては。」

ただいま、サヨコ。これからまた、僕の手でたくさん気持ちよくしてやる
からな♡♡」

愛おしさと欲の入り混じった紅い瞳が、未だひくひくと震えてはそのたびに絶頂を繰り返すサヨコのおまんこを見下ろしています。

美しい唇がその名前を紡ぎます。——彼女がここで目を覚ました、あの日と同じように。

——会いたかったよ、サヨコ。

——僕の名前はフィリト。君の運命の番(つがい)であり、淫魔……君をしあわせにするために存在しているいきものだよ。

体温の感じられない整いきったかんばせに蕩けるほどの熱を乗せて、彼——フィリトはそう自己紹介したのでした。

そのときの光景を、サヨコは今でも鮮明に思い出すことができます。ほんの一瞬、恐怖も困惑も忘れるほどに美しいかんばせに見つめられたあの時

間。けれど次第に混乱が追いついてきて、ここはどこなのか、どうして自分はここにいいのかと訊ねて。

——ここは僕の家だよ。君と僕の愛の巣と言ってもいいね。

——ずっとここから、魔法を使って君を見ていたんだ。いつも頑張っている君のことを。

——一目見た瞬間に分かったんだ。君こそが僕の運命の相手だって。

——だからこうして、君と“契約”を結んだんだよ。番として、いつまで

も一緒にいられるように。

そんな言葉が返ってきた、あの日のことを。

もちろん、理解などひとつもできませんでした。平凡なただの人間である自分がそこまで執着される理由はもちろんのこと、「淫魔」というフレーズに、彼女は想像上の生き物であるという以上のイメージを抱いていなかったのです。

ドッキリ？つけ耳？混乱する頭のまま問いかけるサヨコに、淫魔を自称す

る少年は申し訳なきような、どこか照れくさそうな表情を浮かべながら言いました。

「……すまない、いきなり喋りすぎたね。どうやら君に会えたことが嬉しすぎて舞い上がっていたようだ。——言葉よりも雄弁に伝える方法が、僕らにはあるというのに。」

それなら、もっと分かりやすく教えてあげよう。

淫魔の生態、番の契約について。

それと——僕がどれだけ、君を愛しているかについても」

彼はにっこりと微笑みながらそう言って——サヨコの体に教え込みました。

淫魔の選ぶ“番”という概念とその契約についてのこと、自分が彼女に向ける愛情と執着について、……そして淫魔の生み出す、人の身には過ぎた快楽と法悦。それら全てを、彼女が泣き喚きながらイキ狂うまで教え込んだのでした。

サヨコは一度もこの部屋から出たことはありません。食べ物も飲み物も一切口にしていませんが、飢えも渴きも全く感じたことはありません。同じように眠たくなったことも、排泄をしたくなかったことも、今までに一度もありませんでした。

淫魔いわく、それも契約によるものとのこと。

「淫魔の番になった人間は、番と寿命を共有することになるんだ。僕たち淫

魔の寿命はほぼ永遠に近いから、サヨコも同じだよ。

それに、淫魔の番は食事も排泄も必要なくなるんだ。ただ淫魔から与えられる快楽を享受するだけで満たされる体になっているからね」

最初に顔を合わせたとき、彼——フィリトはそう言って微笑みました。そして青ざめたサヨコの顔を見て、不思議そうに首を傾げたのです。

「ん？どうしたんだ、サヨコ？……ああなるほど、そういうことか。

安心してくれ、もちろんお潮や愛液は別だとも。番が気持ち良くなってく

れている貴重なサインを取り除くほど、淫魔の結ぶ契約は愚かなものじゃない。……それに僕だって、君が本気汁を噴き出しながら絶頂する姿が見られないなんて絶対に嫌だしね」

寿命はほぼ永遠、食事も排泄も必要ない。

自分の体を作り変えられてしまったことへの混乱によって表情が強張ったのをどう捉えたのか、淫魔は彼女の頬をそっと撫で、額へと優しく口付けました。……こんな状況でさえなければ、誰もがうっとりしてしまうような美

しい微笑みを浮かべながら。それを見てサヨコが抱いたのは、

〔嗚呼、このひとは本当に、人間とは違う理屈で生きてるんだ〕

という、どうしようもない絶望感でした。

そしてその絶望は、今に至るまで何ひとつ変わっていません。

「僕には触手を通じて君の声や肌の感触、体温に息遣い、絶頂時の体の震えから吐き出した愛液の味まで伝わっていたから寂しくはなかったけれど、こ

れはあくまで一方通行の繋がりだ。僕の体温を君に伝えることは出来ない。

……君に快感以外の感覚を与えたくないから、仕方ないことではあるんだけどね。

僕の代わりに相手を任せていた触手たちは、君をちゃんと満足させられていたかな？少し確認させてくれ」

彼の言葉とともに。

サヨコを責めたてていた触手の動きが、ぴたりと止まりました。胸、おま

んこ、クリトリス。彼女の弱点を覆い尽くしていた薄桃色の肉筒たちが離れ、触手ベッドの中にするすると収納されていきます。あとに残ったのは、元の姿を思い出せなくなるくらいに大きくなりぴんと尖ったよわよわ突起と、解され蕩されてぐちよぐちよになったとろとろおまんこだけ。

地獄のような快楽から解放された——わけではありません。そのことを、彼女は嫌というほど知っています。

「うん、いつも通り世界一美しい体だ。乳首もクリトリスもこれでもかって

くらいに全力で主張してくれているし、おまんこもぐちよぐちよのどろどろ……。その上きゅんきゅんとナカがうねっているのが分かる。今すぐにも愛する番(つがい)を受け入れる準備は出来ている、とこちらも全力でアピールしてくれているね。……君に愛情を返してもらえて嬉しい。僕も愛しているよ、サヨコ」

うっとりとして、蕩けるような熱を帯びた声で彼は言います。サヨコの開かれた脚の間に座り込み、どろどろのおまんこを鼻先がくつつきそうなほどの至

近距離で見つめながら。

彼女にとっては、何もかも理解できないことでした。おっぱいもクリもおまんこも、どろどろなのはすべて触手のせいです。彼がこの部屋を出てから十四日と二時間三十六分、一秒の休息もないままひたすら快樂を与え続けられていたせいです。

クリトリスを媚薬まみれのぷにぷに触手オナホで扱き上げられ続けて、平気な女性など存在しません。

のスポットを媚薬でどろどろの触手で何度も何度もノックされて、イキ狂わない女性などいるはずがありません。

全部自分でやったことのはずなのに、どうしてそんな解釈が出来るのでしょうか。

疑問は尽きませんが、問いかけることは出来ませんでした。

彼の細い指が、彼女——サヨコの太ももに触れたからです。

「んひっ!?!♡♡ふ、ううん♡♡くう……♡♡ふあああ♡♡♡♡」

すべすべとした指先が肌に触れた、その瞬間。彼女が一際甲高い声を上げました。全身の感覚がぐっと鋭敏になったような感覚が、サヨコを襲っていきます。

彼女にとって、これはいつものことでした。彼に触れられるたび肌が熱くなり、本来性感帯でもないはずの部分までぞくぞくと震えて気持ちよくなってしまうのです。その姿はまるで、彼に与えられる快感を全て受け止めようと体が勝手に準備を始めているかのようにでした。

びくびく、びくびくと肌を震わせながら与えられる快感を味わうさまを見て、眼前に立つ彼の喉がごくりと上下しました。宝石のような深紅の瞳に、ぎらついた熱が宿っています。

「っ……♡♡あー……すまない、サヨコ。ひとつ、君に嘘をついてしまっ
た。

寂しくなかったなんて、嘘だ。ずっと君に触れたくてたまらなかった。余裕のある男だと思われたくて見栄を張ってしまった僕を、どうか許してほし

い」

興奮を隠しきれない雄のぎらつきと、愛する人を前にした男の蕩けるような甘さ。両方を宿した瞳に射抜かれて、サヨコの心臓がどくんと大きく跳ねました。それと同時に、おまんこからも愛液がこぷりと溢れます。……脳内ではひたすら嫌がって絶望すらしているはずなのに、体の方は与えられる快感を待ち侘びているようでした。そんな自分に気付き、サヨコの胸の中は恥ずかしさと泣きたい気持ちでいっぱいです。

(わ、私……こんな変態じゃなかったはずなのに……♡♡)

羞恥で顔から火が出そうになるサヨコを尻目に、触手ベッドが彼女の手を吐き出すようにして解放しました。下半身は未だ埋まったまま、上半身だけ自由になった状態です。

これはどういうことでしょうか？今までは四肢を拘束され身動きを封じられていましたが、この状態であれば足を引き抜くため踏ん張ることくらいなら出来そうです。逃げるチャンスが巡ってきたのでしょうか。

……もちろん、そんなわけはありません。

これから起こることを——正確に言えば“やらされること”を、サヨコは嫌というほど知っていました。そのため逃げようともがくこともせず、ただ泣きそうな表情を浮かべながらおまんこをひくつかせています。

「あ、ああ……やだあ……♡♡」

ひくひく♡♡きゅんきゅん♡♡

どこか甘さの混じる上擦った泣き声と、震えて愛液を溢すおまんこ。

どちらの“言葉”を淫魔が信じるかなど、分かりきったことでした。

「サヨコ。——“両手でおまんこを開いて、僕によく見せて♡♡”」

淫魔の紡いだ言葉が、サヨコの耳に届きます。砂糖を煮溶かしたような甘ったるい声が脳みそに届いた、その瞬間。

……くばぁ♡♡

サヨコの手が、本人の意思とは関係なく動き始めました。自分のおまんこの縁に手を伸ばし、おまんこ肉をかき分けます。どろどろのナカも、ぽって

りと膨らんだクリトリスも、まるで目の前の彼に向けて見せつけるかのよう
に。

もちろん、これは彼女が望んでやっていることではありません。現にその
顔は羞恥で真っ赤に染まっています。

「ふ、うう〜…♡♡」

あまりの恥ずかしさに、うっすらと涙すら滲ませながら震えるサヨコ。し
かしその手はおまんこを見せつけたままびくともしません。

それもそのはず。これは彼女が一方的に結ばされた“契約”のうちのひとつなので。

フィリトが魔力を込めて下す。“命令”に、サヨコは逆らうことが出来ません。たとえどれだけ恥ずかしかろうとも、“契約が続く限り”言いなりにするしかないのです。

「……はー……♡♡サヨコのおまんこはいつ見ても最高に綺麗だな♡♡クリトリスもぷっくり膨らんで、まるで果実みたいだ♡♡思わずむしゃぶりつき

たくなる……♡♡あ、今びくって震えた♡♡脚の親指にもぐっと力を入れ

て、おまんこを締めようとしているね♡♡可愛い♡♡

ふふ、やっぱり拘束は物理に限るなあ♡♡いくら契約によって一方的に動きを止められるといっても、可愛い腰のへこつきやバレないように頑張って足ピンしようとする動きまで止めてしまったらもったいないからね。やっぱりこの触手ベッドを作って正解だったよ♡♡

「んやあ……♡♡いわないでえ……♡♡」

紅く美しい瞳にこと細かに観察され、恥ずかしさからさらに愛液を溢して
しまうサヨコのおまんこ。あまりにも哀れな光景を満足そうに眺めながら、
ファイリトが口を開きます。

「こんなに敏感になったクリトリスなら、自分で触ってもいけるんじゃない
か？♡♡ちようど可愛いお手手も媚薬まみれになってることだし♡♡」

もちろんそれは助け舟などではありません。むしろよりいっそう彼女を追
い詰める、悪魔のような言葉でした。

「へ？……っひ♡♡そ、そんなの……♡♡」

フィリトに何を“命令”されるかうっすらと察したサヨコはいいやいやと首を振りますが、彼が耳を貸すことはありません。

何故なら、彼は確信しているのです。彼女が本当は嫌がっていないことを。彼女が自分から与えられる快感を、心から受け入れていることを。

「サヨコ。——“片手でおまんこを広げたまま、自分の指でオナニーしてみてください♡♡やり方はサヨコがいちばん気持ちいいと思う方法で♡♡”」

フィリトの言葉が、サヨコの耳に入ります。どこまでも楽しげな声が彼女の脳みそに号令をかけて、媚薬粘液のまわりついた指を動かし始めました。

まず片手をピースの状態にして、おまんこの肉をかき分けます。先程までより少し上、真っ赤に張り詰めたクリトリスが全て剥き出しになるように。

さんざん弄り回されて膨らんだクリトリスはもうとっくに包皮どころかおまんこ肉にも隠れきれない状態になっているのですが、彼女の脳みそは「それ

では足りない」と判断したようです。

(ち、ちがうっ♡♡わたしこんなこと思ってない♡♡ぼってり膨らんだクリ

ちゃんひたすら弄り回して気持ちよくなりたいだなんて思ってないのに♡♡

なんで体が勝手に動いちゃうの♡♡)

頭の中で言い訳を繰り返すサヨコ。ですがそれは全て、無駄に終わりました。

何故なら、彼女はもうとっくに理解してしまっているのです。フィリトの

下す“命令”がいかにか絶対であるか。彼がおまんこを広げろと言えば広げる
しかないし、自分のいちばん気持ちいいやりかたでオナニーをしろと言われ
れば、その「自分がいちばん気持ちいいやりかた」を彼の前に晒すしかない
のです。こうして弱点を見せつける、いちばん恥ずかしいポーズをとりなが
ら。

媚薬をまとった指が、ばつばつに膨らんだクリトリスに触れます。ぴんと
尖って主張する先っぽに、ちょんっ♡♡と。

——その瞬間、彼女の背筋をぞくぞくっ♡♡と、電流のような快感が走り抜けました。

「おっ♡♡〜っ♡♡ふ、ううっ……♡♡」

思わず腰をかくつかせながら甘イキするサヨコ。長い間ずっと媚薬漬けでいじめ抜かれたクリトリスは、自分の指でほんの少し触れただけでも絶頂まで駆け上ってしまうほどに育ちきっていました。

もしこれがただのオナニーであれば、彼女はそのまま手を止めていたこと

でしょう。こんなにあっさり上り詰めてしまうほどに気持ちいいのに、このまま続けてしまったらどうなるのか。自分の体がおかしくなってしまうのではないか。そんな不安に駆られて、すぐに手を止めていたはずです。

しかし、これはただのオナニーではありません。サヨコの恥ずかしい姿を見るのが大好きなフィリトによる、彼のためのショーなのです。

ですから当然、途中で止めることなど許されません。

かりかり……♡♡かりかり……♡♡

すりすり……♡♡すりすり……♡♡

「ふうふう〜っ♡♡んっ♡♡くう♡♡ふ、おお〜……♡♡」

「ふふ、相変わらずサヨコは裏筋なでなでが大好きだな♡♡クリちゃんの裏筋ゆっくり撫でてるだけなのに泣きそうな声を上げながら腰へコしてる姿、

最高に可愛いよ♡♡」

紅い瞳を細めながら、サヨコのオナニーを鑑賞するフィリト。穏やかなアルトボイスには、あふれんばかりの情欲が滲んでいました。

熱っぽい声で可愛いと囁かれ、サヨコのおまんこからは粘っこい本気汁が溢れています。

(こ、これじゃまるで喜んでるみたい……♡♡)

自分の体の反応に絶望するサヨコでしたが、その認識はあまりにも今更としか言いようのないものでした。

だってもうずっと前から、彼女の体はフィリトに屈服しているのですから。

穏やかで美しいアルトボイスが届くたび、彼女の脳みそは甘く蕩けて支配権をやすやすと明け渡します。

紅い宝石のような瞳に「見られている」と認識するたび、肌がぞくりと震えて全身の感度が何倍にも引き上げられたような錯覚に陥ります。媚薬でも暗示でもなんでもない、彼女自身が生み出した快樂への服従心によって。

未だ抵抗を続けているのは——抵抗しているつもりになっているのは、彼女の表層意識だけ。

今だってそうです。蕩けるような甘さの滲む瞳に神経を炙られて、自分のクリトリスをいじめるサヨコの指の動きはどんどんと速くなり、くちゆくちゅ♡♡ぴちャぴちャ♡♡と卑猥な水音が辺りに響き渡っていました。

かりかり♡♡かりかり♡♡かりかり♡♡かりかり♡♡

すりすり♡♡すりすり♡♡すりすり♡♡すりすり♡♡

「ふ、んううう〜っ♡♡ふおおおっ♡♡んあぁっ♡♡んおっ♡♡」

「お、ペース上がってきてるね♡♡腰もへこへこって可愛い動きを繰り返し

てるし、喘ぎ声もどんどん短くなってきてる♡♡そろそろ深イキ我慢できなくなってるんじゃないか？♡♡」

最愛の番の痴態を眺めながら、うっとりとした表情で呟くフィリト。

「サヨコは甘イキを繰り返しながら深い絶頂に近づいていくのが大好きだもんな♡♡だから最初は弱い刺激から始めて、どんどんペースを上げていくやらかたがお気に入りなんだよな♡♡でも最近はクリもおまんこも育ちすぎて、ひと撫ですぐに頭が真っ白になるほど気持ちよくなっちゃうからわざ

と腰へこ多くして気持ちいいの頑張って逃してるんだよな♡♡」

にこにここと微笑みながら放たれた言葉に、サヨコの全身がかつと熱くなります。

(ぜ、ぜんぶバレちゃってる……♡♡)

自分の恥ずかしいオナニー癖までしっかりと言い当てられ、恥ずかしさでさらに体がぞくぞくと震えてしまうサヨコ。もちろん、手を止めることは一切許されていません。

「泣かないで、サヨコ。何も恥ずかしいことじゃない。僕はサヨコが腰へこしてるのを見るのが大好きなんだ」

ささくれひとつない美しい指が、サヨコの頬に落ちる涙を拭きました。羞恥心が限界を迎え、いつの間にか泣き出してしまっていたようです。眉を下げながら最愛の番を気遣うその眼差しは、そこだけを見ればまるで御伽噺に出てくる王子様のようにでした。

「だって、サヨコが腰へこしてるのは気持ちいいのから逃げようとしてるわ

けじゃないだろう？見てればすぐに分かるよ。クリちゃん指先でこちよこちよ♡♡かりかり♡♡ってしてるときの顔、とろとろに蕩けてるもんな♡♡脳みそぐつぐつ煮えたぎって、頭が真っ白になるまでの時間をながく楽しむのが好きなんだよな♡♡」

「んおおおお♡♡ち、ちが♡♡そん、なあっ♡♡」

蕩けるような甘さをはらむ声に体の神経をじりじりと炙られて、じわじわと視界の端が白く染まり始めています。ちがう、と否定したくとも、もはや

まともな言葉を発する余裕ありません。

(ちがうっ♡♡こんな、気持ちいいのなんて好きじゃないっ♡♡……好きじ

やないのに♡♡ゆびとまんないよ♡♡)

どれだけ脳内で必死に否定しても、口を開けば出てくるのは甘ったるい喘ぎ声だけ。愛液を垂れ流し続けるおまんこにぶるぶると震える太もも、何より発情しきった本人の表情を見れば、どちらが正しいのかは一目瞭然でしょう。ぐちゃぐちゃでどろどろな番の痴態をこの上なく幸せそうな表情で眺め

ていたフライドが「それに、」と続けます。

「サヨコは俺に、この腰へこダンスを見られるのが大好きだもん♡♡」

「っ、！?♡♡」

びくん。サヨコの腰が、ひととき大きく震えました。よっぽど言い当てられたくなかったことだったのか、それとも認めたくなかったのか。唇をぎゅっと引き結びながら、いやいやと首を小さく振っています。もちろん自分の肉豆をいじめる手は止めないまま。

「情けない腰へこダンス、僕に見られるたび気持ちよくなっちゃうんだろ？」

♡♡目が合うたびにおまんこからえっちな汁いっぱい垂れ流してるもんな♡

♡」

「ちっ、ちがうう……♡♡んあっ♡♡そんなあ、へんたいじゃ、ふあああっ

♡♡」

絞り出すようにして吐き出した否定の声は、クリ裏を擦り上げ始めたサヨ

コ自身の指の動きによって呆気なく中断させられてしまいました。絶え間な

く襲いくる甘イキに悶えるサヨコを見ながら、淫魔の紅い瞳がすう、と細ま
ります。

「……なんだ、違うのか」

今までと違う、ほんの少し温度の低い声。サヨコにもう少し余裕があると
きであれば、「やばい」と危機感を抱いたことでしょう。抱いたところで、

逃げるすべを持たない彼女にはどうすることも出来ないのですが。

そう考えれば、甘イキの波に吞まれながら自分で裏筋をこちよこちよして

追いうちをかけることを強制されているせいでフィリトの声が届いていない
現状は、むしろ彼女の精神衛生上良かったのかもしれない。たとえばほんの
一瞬でも、「これからどれだけ凄まじい絶頂地獄が待っているか」という絶
望を認知せずにいられたのですから。

もちろん、フィリトにだって分かっています。

この「ちがう」はサヨコの本心ではなく、ただの照れ隠しであること。彼
女がいかにかに自分のことを愛してくれているか、自分の与える快感を愛とも

に受け入れてくれていたのか。

ここにきた当初は触っても何も感じなかった胸の突起を、それだけでイけるほどに開発したのは自分です。おまんこの肉壁すべてにサヨコ専用の特濃媚薬を染み込ませ、常に発情してきゅんきゅんと疼いてしまう状態にしたのも、快感を得るためだけにある器官であるにも関わらずずっと手付かずで放置されてきた彼女の可哀想なクリトリスを、撫で回しただけで泣き喚きながら絶頂してしまうような特大の弱点に育て上げたのも。

おしっこ穴だって、今では立派な性感帯です。出会ってから数日経ったころ、もっとたくさんクリトリスを責めてサヨコを喜ばせたいという純粋な気持ちから、予定より大幅に早く体内に埋まった陰核脚の開発に取り掛かったあの日。おまんこの少し上に位置するその小さな穴を舌で丁寧に舐めほぐし、細い触手で狭い穴の中をぬぷぷっ……♡♡と押し入りました。もちろん、痛みを一切与えないため常に媚薬を分泌した状態で。

触手によって陰核脚全体を激しく揉みしだき、表に露出したクリトリスは

淫魔の口内でひたすら吸い上げ、扱き上げ、なぶり回し。

「いぐいぐいぐいぐつつっっっ♡♡♡♡♡もうむり♡♡♡♡♡しんじやう♡♡♡♡♡

しんじやうからあ♡♡♡♡♡もうゆるひてええ♡♡♡♡♡」

髪を振り乱し泣き喚きながら絶頂する最高に愛しい番の姿を、フィリトは今でも当時の幸せな気持ちとともに思い出すことができます。

番の気持ちを疑っているわけではありません。彼女が自分を愛してくれていることは分かりきっていて、自分たちが相思相愛の番どうしであることは

疑いようもありません。

なんならむしろ、他の淫魔に申し訳ない気持ちすら抱いています。こんなに可愛らしく、美しく、それでいてえっちで素敵な女性に愛してもらえて一緒に永遠の時を過ごせるなんて、自分はどれだけ幸運なんだろう？他の淫魔たちが知ったらきつと羨ましがらるだろうな……と。

（もっともこれはサヨコへの愛情によってフィルターがかかっているだけであり、ひとりの番を生涯愛し抜く淫魔という種族であればほとんど例外なく

皆同じことを考えています。一步間違えば諍いに発展しそうなすれ違いですが、同時に淫魔は嫉妬深い種族でもあり、愛する番を他者の目になど絶対に触れさせたくないと考える者が多いため意見の違いが表面化することは滅多にないのでした」

彼女からの愛を疑っているわけではありません。

……ですが、フィリトはまだ若い淫魔でした。ここでいう若いとはあくまで淫魔基準であり、人間よりは遥かに長く生きてはいるのですが、なにぶん

精神性はまだ子どもです。相手の言葉ひとつですぐ不安になり、愛を確かめずにはいられなくなってしまふのです。

「サヨコ、こっちを見ろ」

「ふあああ♡♡っ、！？♡♡は、ひっ♡♡」

フィリトの声を聞いて、甘イキに浸っていたサヨコの頭がぐんと持ち上がります。ゆるく細められた紅い瞳と、整いきったかんばせに浮かぶ色を見て、……彼女はようやく、自分が選択を間違えたことを悟りました。

「……っ、あ……♡♡んう……♡♡ふ、うう……♡♡」

「おや、どうした？サヨコ。そんなにおまんこをひくつかせて。僕に見られて興奮するような変態じゃないんだろ？♡♡」

にっこりと微笑むフィリト。

彼の言う通りでした。彼の言葉が脳みそに届き、「見られている」と認識した瞬間、サヨコのおまんこはきゅうんっ♡♡と媚びるようにひくつきはじめたのです。まるで鑑賞されていることを喜ぶかのように。

それだけではありません。とつくに育ちきった肉豆もよりいっそう硬さを増し、真っ赤に充血したままひくひくと震えています。終わらない裏筋いじめを自分で行なっているサヨコには、それがはっきりと分かってしまいました。

「んおっ♡♡ほおおっ♡♡ふ、くうう♡♡んああっ♡♡」

かりかり♡♡かりかり♡♡かりかり♡♡かりかり♡♡

すりすり♡♡すりすり♡♡すりすり♡♡すりすり♡♡

「あれ？どうしたサヨコ、そんなに無理して裏筋こちよこちよのペースを上げなくていいんだぞ？♡♡僕に見られながら腰へこダンスしたって気持ちよくもなんともないんだろ？♡♡そんなに腰をがくがくさせながらどろどろの甘イキ顔披露してくれたって、僕が楽しいだけだ♡♡無理せず自分の気持ちいいペースを保っていいんだぞ♡♡」

にっこりと、それはそれは愉しげな笑みを浮かべながら言葉を紡ぐフィリト。気持ちいいペース、と言われても、サヨコが指を動かす速度は変わりま

せん。それはつまり、彼に見られながらぷっくり膨らんだクリトリスを弄り回すこの速度が自分にとって一番気持ちいいのだとアピールしているようなものでした。

(こ、こんなのっ♡♡恥ずかしすぎるう♡♡いやなのに♡♡ゆび止めたいのに♡♡なんでとまんないの♡♡)

内心でどんなに泣き喚いても、サヨコの指が止まることはありません。快楽神経がみちみちに詰まってころころと硬くなった肉豆を指の腹で容赦なく

捏ね回し、自分で自分を追い詰めています。

つらくてたまらないのに、やっているのは全て自分。そんな矛盾した現実
に、彼女の頭はどんとバグっていくようでした。

そして何より——そんな恥ずかしい姿を、目の前の彼に見られている。そ
の事実が彼女をよりいっそう追い詰めていきます。

「あふっ♡♡く、ひい♡♡んああ♡♡ゆびとまんない♡♡も、むりい♡♡お
っきいのくる♡♡おっきいのきちやうう♡♡」

がくがくがくっ♡♡♡がくがくがくっ♡♡♡

「へえ、おっきいのきちやうんだ♡♡大変だな♡♡動けないのに必死でしたばたしてて可愛い♡♡太ももまでぶるぶるして深イキカウンドダウン始まつてるの丸わかりなのに、指でしっかりおまんこ開いて見せつけてくれるんだな♡♡えらいぞ♡♡」

おまんこから愛液をこぼしながら悲鳴にも似た嬌声を上げるサヨコの姿を見て、ファイリトはよりいっそう笑みを深くしました。ゆるく吊り上がる唇の

端から、真っ赤な舌がぺろりと覗きます。

正直なところ、フィリトの機嫌はほとんど治っていました。

そもそもそこまで本気で怒っていたわけではないのです。愛する番が自分の視線ひとつで興奮してくれているという最高に幸せな事実を、他でもない番に（照れ隠しとはいえ）否定してしまったことが少し悲しかっただけ。自分の視線ひとつ、言葉ひとつに言い逃れ出来ないほど反応して可愛い姿をさらけ出してくれている番の姿を見て、若者らしいささやかな癩癩はあっさり

と消え去っていました。

……とはいえ、それでサヨコの状況が好転するかといえば全くそんなこと
はないのですが。

「ああ、そうだ。——深イキきめたら、その瞬間に僕がサヨコのおまんこ食
べるからな♡♡」

真っ赤な果実のように、ぱつぱつに膨らみきったクリトリス。本人の意思
とは関係なくくぱくぱ♡♡と開いては閉じながら粘っこい本気汁を垂れ流す

おまんこ。

たとえば今奇跡的に体の支配権を取り戻せたとしても、ここまできて手を止めることなんてとても出来ない。そんな深いキ確定ルートに乗ってしまったサヨコの耳に、フィリトの愉しげな死刑宣告が届きました。

「……へ？♡♡っひ、あ、ああ……♡♡」

サヨコの表情が一気に絶望に染まります。ひくん、と一際大きくおまんこが戦慄きました。

「ふふ、喜んでくれて嬉しいよ♡♡サヨコは僕におまんこもぐもぐされるの
大好きだもんな♡♡

……おっとすまない、実はさつきからずっとよだれを飲み下すのに一苦労
してたんだ。俺の体液は一滴残らずサヨコのものなんだから無駄にしちゃい
けないのに、君の可愛い姿を見ているだけでどんどん溢れてくるものだから

……♡♡」

恥ずかしそうに頬を染めながら、溢れたよだれを手の甲で拭うフィリト。

誰もが恋に落ちてしまうようなその姿を見ても、サヨコの胸に渦巻くのは甘い絶望だけでした。

何故なら、サヨコはもう知っているのです。

淫魔の体液は例外なく、番の人間にとってはとびきり強い媚薬になると。

「おや、またおまんこが震えているね。この舌がそんなに好きかい？♡♡」

「♡♡♡♡ひいっ……♡♡んあああっ♡♡♡」

とろり、てらてらと唾液で濡れそぼった舌をおまんこのすぐ目の前に突き

つけられ、思わず甘ったるい悲鳴を漏らすサヨコ。

「ふふ、そんなに喜ばれると照れちゃうな♡♡クリちゃんもひくひく震え

て、食べてくださいってアピールしてくれてるみたいだ♡♡……おっと、そ

んなにクリちゃんこちよこちよのスピード速めなくたっていいのに♡♡サヨ

コが僕に見られながら全力クリオナで深イキ姿晒しちゃうのも、イって頭真

っ白になった瞬間に僕の濃厚クンニで絶頂地獄から降りて来られなくなっち

やうのも、もうとっくに全部確定事項だぞ？♡♡今更指の動きを速めたとこ

ろで数秒の違いしかないのに、そんなに待ちきれないと思ってくれてるんだ
な♡♡嬉しい♡♡」

〔んあああ♡♡♡♡♡ちがうっ♡♡♡♡♡ちがうちがうちがうう♡♡♡♡♡やだ
やだいきたくない♡♡♡♡♡いきたくないのに♡♡♡♡♡誰か指止めてよおお
お♡♡♡♡♡〕

サヨコの脳内の悲痛な叫びに、耳を貸すものは誰ひとりとしていませんで
した。……彼女自身の肉体ですら。

こちよこちよこちよこちよ♡♡かりかりかり♡♡

膨らみきったクリトリスの裏筋を、爪の先で優しくくすぐり続けるサヨコの指。彼女の体は知っているのです、こうやっていじめ続けると自分の肉豆はどンドン硬く大きくなっていくことを。そして極限まで硬くなった肉豆をざらざらの舌で押し潰してもらおうと、全身が蕩けてなくなってしまうようなほどに気持ちがいいということも。

もはやサヨコに、自分の体を制御する術はありません。ただ泣きそうな表

情を浮かべたまま、ぴんと勃ったクリトリスの根元を自分の指のつま先でか
りかり♡♡と優しくほじり続けています。

……そして、とうとうそのときが訪れました。

ぶわり。サヨコの肌が粟立ちます。全身の感覚が鋭敏になるような、高み
に上り詰めるような感覚。彼女がここへきてからもう何度も味わってきた、
重くて深いガチイキの前兆です。

(あ、ああっ♡♡もうだめ♡♡いっっちゃう♡♡おっきいのきっちゃう♡♡イキ

地獄はじまっちゃう♡♡やだ♡♡た、耐えないとおお♡♡)

全身をがくがくと震わせながら無駄な抵抗を試みるサヨコ。おまんこにきゅっ♡♡と締めながら足の指に力を入れることでどうにか抗っているつもりになっていますが、フィリトの目にはむしろおまんこに全力で神経を集中させることでいちばん気持ちいい絶頂を迎える準備をしているようにしか見えません。自分の行動が淫魔を喜ばせていることにも気付かないまま、その無駄な抵抗を続ける決意すら押し寄せる快感にあっさりと呑み込まれてい

くのでした。

かりかりかりかり♡♡♡♡♡こちよこちよこちよこちよ♡♡♡♡♡すりすりす
りすり♡♡♡♡♡

「んおおっ♡♡♡♡♡くうっ♡♡♡♡♡根元ほじほじきくうっ♡♡♡♡♡……っ
あ、も、むりっ……!♡♡♡♡♡だめだめだめっ、いぐっ……!♡♡♡♡♡」

がくがくがくがくっ♡♡♡♡♡

……ふしゃあああっ♡♡♡♡♡

「おっっ、ほおおお~~~~♡♡♡♡~~~~♡♡♡♡」

まるで膨らみきった風船が割れるように、サヨコの体の中へ蓄積された快感が勢いよく弾けます。

視界が真っ白に融け落ちるような感覚が彼女の全身を襲いました。頭のとっぺんから足のつま先まで蕩けるような快楽に浸されて、敗北宣言のようなイキ潮がおしっこ穴から勢いよく噴き出しています。

「は、へえ~~~~…♡♡んおっ♡♡おおっ♡♡」

おしっこ穴からぷしっ♡♡ぷしっ♡♡と透明な液体が噴き出すたび、呼応するようにおまんこがぐくぐくっ♡♡と震えます。媚薬触手によって徹底的に開発され立派な性感帯となった尿道の粘膜は、液体が通り抜けるだけでも追いうち絶頂をキメてしまうほど敏感になってしまっている……という残酷な事実を改めて全身で味わわされ、腰をへこつかせながらのけ反り絶頂というあまりにも情けない姿を晒してしまいました。

常人であれば、これだけの快感を与えられればもうとつくにキャパオーバー

ーで気絶していることでしょう。ですが彼女にとって残念なことに、今のサヨコは常人ではありませんでした。

淫魔の番となった人間は、結ばれた契約の力により気絶することも狂うこともないのです。淫魔の魔力によって精神は護られ、契約が続く限り永遠に正気を保ち続けることになります。

一見すると良いことのようにも思えますが……それはつまり、どんなにイキ狂わされても終わらない絶頂地獄に突き落とされても、発狂や気絶による

逃げすら許されていないということだ。

「……それじゃ、いただきます♡♡」

——そして今まさに、サヨコにとっての終わらない絶頂地獄が始まろうと
していました。